

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

いつの間にか、葉桜の季節となりました。小田原は「北條五代祭り」で5月がスタートします。パレードのない自粛ムードの祭りになりましたが、元気な神輿が今年も小田原の町を一つにしてくれることでしょう。市議選に明け暮れた4月でした。新人議員9名を誕生させた小田原は、着実に世代交代が始まり、市民の力が試される主体的な街へと期待が膨らみます。「小田原の町には美術館がよく似合う。」(岡信孝)「アートはみんなを幸せにするもの」アトリエ訪問の若いアーティストの思いを、多くの方に伝えたい。多くの方にふれてほしい。「人を動かす力のあるアートの力」を、もっともっと多くのかたに届けられるように、新九郎も新たな気持ちでスタートです。

新九郎 5月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
5/4(水)-5/9(月) 茂田綾子水墨画展	3年ぶりの個展。今回は桜を主に、光を合わせた風景、季節の花など。また川端龍子氏の四国遍路 88カ所を模写した冊子など40点以上が展示される。
5/11(水)-16(月) 新九郎デッサン会展	ギャラリー新九郎で毎月開催しているデッサン会のメンバーによる作品展。今回は10名の参加。
5/14(土) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
5/19(木)-22(日) 禅文化展覧会	東泉禅院所蔵の書画による、禅文化の展覧会 22日(日)岸達志住職の講演
5/25(水)-30(月) 彫刻家ひでひこ展	人を生かし、楽しませることに芸術の目的があると思う。 愛知県芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

会期・展覧会名	会場
4/19(火)~5/4(水) 月・休廊 住谷重光展	ATELIER・K 045-651-9037 横浜石川町
5/4(水)~9(月) 大門雅絵展	お堀端画廊 0465-23-7819
5/11(水)~16(月) 山本真郎作品展 楽 Raku	お堀端画廊 0465-23-7819
5/18(水)~23(月) 香川 猛展	お堀端画廊 0465-23-7819
5/3(水)~9(月) 第62回穂真書道会選抜展	飛鳥画廊 0465-24-2411
5/11(水)~16(月) あざや会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
5/18(水)~23(月) 深美会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
5/25(水)~30(月) あらたま展	飛鳥画廊 0465-24-2411
4/23(土)~5/15(日) リアン・クスカ展	すどう美術館 0465-36-0740
5/3(火)~8(日) タブローアート パリ展	茅ヶ崎市民ギャラリー 0467-87-8384
5/1(日)~30(月) 森下純子小さな板絵展	はげ八鯨 火休 0465-22-0945
5/25(水)~29(日) 第64回市展 2011	生涯学習センターけやき 0465-33-1706 文化政策課

パリだより 横井山泰



陰鬱な冬空から一転、すっかり初夏である。夜9時の日没はさらに伸びるという。一番いい季節を迎えようとしている。

帰国した友人からもらった50~120号の木枠を張って新シーズンのスタートとした。制作のプロセスは渡航前とは大差はない。ただ、数か月間モデルを描いて気付いた事がある。モデルを観て描くのも、存在しないモデルを画面の中に見つけて描くのも同じで、そこ

に何かが観えていなければ描けない。文章も話術も同じことだろう。何を描いているのか?自分ではっきりすると入りやすい(暗中模索でとんでもない所に出してしまうこともあるが)。自分なりの大きな変化としては背景を描くようになった。先月旅した、中世から変わらないであろう農村の景色に感動したのと、アトリエの窓からの眺めが美しすぎるからだ。背景を描きたい気持ちはあったが、照れがあった。いいタイミングなのだろう。



小田原怪獣散歩

若林寧人

子供の頃から大好きな怪獣で、大好きな故郷小田原の名所や風景を紹介するイラストシリーズ



このシリーズには凶暴な破壊獣があまた控えている。だが今はまだそれらを出す心持ではない。そこで思い出したのが以前、新九郎で「スーパー!小田原城展」という展覧会を開催

した時に友人の一住さんが描いた作品だった。それは小田原城を龍が守っているという構図でまさに今の気分に対応しい。そこでそのシチュエーションをお借りして私なりの解釈で描いてみることにした。考えてみれば怪獣には守護獣というジャンルもあるのだ。描いている途中ふと、この龍はひょっとしたら象のウメ子の生れ変わりかも知れないという思いが頭をよぎった。龍神よ、これ以上のすべての災厄から小田原を、関東・東北を、そして日本全体を守りたまえ!



透き通った瞳、まっすぐに人を見つめ、溢れんばかりの情熱でアートへの思いを語る彫刻家「ひでひこ」さんは、人の心にぐいぐい入りこみとらえてしまう実に魅力ある若者だった。

アトリエは 久野の製茶工場の一角の古民家。庭には制作途中の大理石の石彫が置かれ、新茶の収穫前の静かな場所だった。田の字型の家は、粘土用、平面用、額縁作りの部屋と機能的に使い分けられ、座布団を敷いてお話しを伺った部屋には、今までの代表作品とファイルが準備され、丁寧に迎え入れていただくことに恐縮した。

運動も勉強も苦手だったという少年は、自分の役割を探していた高2の時、ロダンの「手」に出会って生きる目的を見出したという。大学院までを過ごした愛知での6年間は、自分を知るために、彫刻の制作に没入したという。「人」には子供のころから興味があった。佐藤忠良を思わせる女性のブロンズ像は、学生時代の作品だ。若さとのびやかさ、生命力あふれる彫刻は、蠟型鋳造という型取りだけで半年かかるという時間を要する技法で、大学でも自分が最後の製作者だろうという決意で制作した渾身の作品だった。

興味ある対象には気持ちが乗り触発されることも多い一方、顔にとらわれてしまう自分を避けるために、大学院ではトルソに移行していく。美しい腿を残した下半身の長い女性らしいトルソは、写実から円と角を調整しながら表現している壺のような、現在の作品と重なってみえるものだった。トルソの発する「空気感」と「張り」と「そり」「女性らしさ」は、この時すでにつかんでいたものだったに違いない。私は、作家の着実な深化を感じ、これから出会う作品にも興味が沸いた。

感性豊かな若者には まだまだ自分探しの時間が必要だったようだ。作家として「追究の狙い」にはまだ出会えてはいなかった。答えを求め向かったのは、文化と宗教の原点インドだった。ムンバイ、エローラ、アジャンタ、寺院や遺跡を巡りながら ついに彼の心を動かすものに出会う。エローラの遺跡だ。広大な砂岩の壁のみでコツコツと彫り続けた壁の美しさ、職人が作り出した彫り跡に、無意識の美を見出し感動したという。決して意味や目的があるのではない、ただひたすらに彫り続けられた遺跡の彫り跡から、フォルムより思いの方が重要なのだ、それで十分だと感じたのだという。インドでの1年は、「どのように表現していけばいいのか」という、表現者としてやっていく為の手ごたえをつかんだ貴重な時間となったに違いない。「ひでひこ」さんの主な作品に、須恵器を思わせる1対の立体「二人の形」がある。この1対はどこから生まれたのか これも興味あることのひとつであった。彼は、子供の頃から埴輪や

土偶、縄文土器が好きだった。その時代にあって自然に生まれたものの意図しない美しさを感じたからだ。また、彫刻というモノクロの世界から、色彩と偶然によって生まれる作品に魅力を感じ、デカルコマニーの制作に熱中した時期がある。別の紙に写し取られた作品は、同じようでも異なった作品となる。「ひでひこ」さんには「人は1対1でなければわかりあえない」という哲学がある。「二人の形」には、彫刻を徹底的に学び、インドで獲得した「思い」さらに「ひでひこ」独自の「個」と「孤」の対峙を形にした、今の「ひでひこ」そのものが表現されているのだと気付いた。1対ではあるが「夫婦」や「あ・うん」ではない、1対の空気感を感じてほしいと付け加えられた。全体をぼんやり観ていた私の見方は、作品をよく見ることでどんどんと広がり始め「二人の形」を通して私の中で想像力が膨らんでいく楽しさを実感したのだった。

ファイル「君の道」は、平面作品だ。はがき大の色々な紙に描かれた黒の線とその間をアースカラーで着彩された作品だ。いつでもどこでもフリーハンドで描いているというシリーズは、目標千枚。今 300 枚を超えたところだという。同じようではない、「個」と「孤」がぎゅぎゅと詰まったファイルは、実に心地よく飽きる事が無い。その確かな線に、「ひでひこ」さんの力を感じた。



最近の「ひでひこ」さんの活動は、多岐にわたっている。「行動するアーティスト」として様々なチャレンジをしている。「アーティストの関わる街づくり」を提唱し、2010年には、伊勢現代美術館

で企画展が行われた。(2010.7.29~8.17) 彼は自分でモノを生み出す力を持つ子供のパワーを知っている。子供たちが描いた木切の家を「ひでひこ」の平面作品に乗せるというワークショップは、一人ひとりの思いの詰まったエネルギー溢れるコラボレーション作品となっていた。そのほかにも、アートツアーや地域の特産品を生かした地元菓子屋とのお菓子作りのコラボレーションなど「アーティストの関わる街づくり」を積極的に形にしてきた。

個展では、見に来てくれた人がにこにこして帰ってくれることが一番の喜びだと語る。会場には毎日つめ 一人でも多くの方と触れ合いたいと目を輝かせる。「人と関わらなければ成長しない」「人間を高めることこそ豊かなこと」と語る若干30歳の若き作家「ひでひこ」は「アートには人を動かす力がある」事をこれからもいろいろな形で実現させていくに違いない。
(新九郎友の会 木下和子)

4月のこと

*「長南康子絵画展」2年ぶりとなる個展は素晴らしく充実した展覧会でした。長南さんの絵は一目でそれと判る、独自のスタイルを持っています。竹ペンによる自由闊達な墨線と、にじみ・濃淡を生かした美しい水彩の重なり、この2年間に色彩は豊かさを増し、円熟期に入ったように思えます。次回の個展が楽しみです。

*おだわらミュージアムプロジェクト(OMP)が進めてきた、長谷川湊二郎展が2012年1月松永記念館で開催されることになりました。昨年平塚美術館で開催され歴代2位の3万人を超える入場者数で大好評でした。今回の展覧会は小田原にご縁のあるコレクターの方のご厚意により、実現の運びとなりました。作品点数は37点と小規模ながら、初期函館風景から晩年の静物画まで、生涯を通してほぼ全ての年代の絵が揃っています。静謐・孤高と評される長谷川湊二郎の作品は、美しい庭園と落ち着いたたたずまいを見せる松永記念館に大変相応しいものと思います。今回の企画はOMPと小田原市の官民協働による実行委員会形式で行われます。新しい試みとして今後の布石になればと思います。